

## 悪者づくり ——オウム真理教事件の物語化を巡って\*——

生駒夏美

1995年3月20日、東京の地下鉄3路線で毒ガスが同時発生し、12人が死亡（2008年8月5日現在）、5,510人が重軽傷を負うという大事件が起こった。「地下鉄サリン事件」である。この未曾有の無差別殺傷、つまりまぎれもないテロ行為を計画・実行したとして逮捕・起訴されたのは、オウム真理教という宗教団体に属する者たちであり、彼らの教祖である麻原彰晃こと松本智津夫であった。捜査および裁判の過程で明らかになったことは、オウム真理教がこの「地下鉄サリン事件」以外にも数多くの事件を起こし、多くの命を奪ってきたこと、そしてそれが教義の名の元に行われていたことである。オウム真理教に関わった事件としては1989年の坂本堤弁護士一家殺害事件や、1994年の松本サリン事件、同年男性信者リンチ殺人事件、1995年2月の目黒公証人役場事務長拉致監禁致死事件のほか、在家信者死亡事件、オカムラ鉄工乗っ取り事件、亀戸異臭事件、池田大作サリン襲撃未遂事件、薬剤師リンチ殺人事件、宮崎県資産家拉致事件、滝本弁護士サリン襲撃事件、江川紹子ホスゲン襲撃事件、駐車場経営者 VX 襲撃事件、ピアニスト監禁事件、会社員 VX 殺害事件、被害者の会会長 VX 襲撃事件、新宿駅青酸ガス事件、都庁小包爆弾事件、自動小銃密造事件、TBSビデオ問題があり、新聞紙上は連日オウム事件報道で埋まった。またテレビでは「オウム特番」が各局で毎日のように放映され高い視聴率を取るなど、一時は日本国中がオウム・パニックに見舞われた感があったり。

だが、すでに一連の事件から13年以上の歳月が経ち、また教団もアレフ、アーレフ、さらに Aleph と改名し、その後分裂し実態が変化・縮小化するにつれ、事件の衝撃も人々の記憶から薄れつつある。いみじくも2008年9月24日、麻生太郎総理大臣が就任時の内閣発表会見において、「地下鉄サリン事件は忘れられつつあるが……」と言及した通りである。一時はあれほどオウム一色だったマスコミも、時折しかオウムの名を掲載しなくなった。東京地裁は主犯を教祖である麻原彰晃とみなし、自首が認められた林郁夫を除き逮捕された実行犯全員と麻原に死刑を言い渡した。麻原に関しては2006年9月、最高裁への特別抗告が棄却されて死刑判決が確定している。2008年9月の段階で、オウム真理教関連では他4名の死刑判決が確定した（その中の岡崎一明死刑囚は2008年7月再審請求を行っている）が、

---

\* 本論考は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B) 課題番号：19710221)「現代における危機の表象と怪物生成のメカニズムについての研究」による研究成果の一部である。

あたかも世間はそれでオウム事件に終止符を打ち、過去の出来事として忘却の彼方へ追いやろうとしているかのようである。

ではオウム真理教事件は解決したのか、というとは決してそうとは言えない。地下鉄サリン事件については、実行犯のうち2名は未だ逃亡中である。また教団幹部だった村井秀夫刺殺事件は真相究明に至っておらず、国松警察庁長官銃撃事件は元信者の警察官が自白したものの、不起訴処分となり未解決である。また、逮捕・起訴された実行犯たちの多くが、犯行は麻原の命令であると証言しているのに対し、麻原自身は弟子が勝手にやったことと関与を否定した。また死刑が確定した麻原であるが、公判で意味不明な言動が多くなり、事件について肝心なことを何も語らずに結審したため、真相はやぶの中なのである。

裁判が長引いたこともあり、また核心部分がこのように不透明なままであることから、一連のオウム真理教事件はすっきりしない感じを残したまま風化しようとしている。だが、それでよいのだろうか。いったいオウム真理教事件とは何だったのか。一体なぜあのような凶悪な事件が連続して起き、なぜ将来有望な若者たちが犯罪に手を染めたのか。本当は何が起こったのか。これらの問いは、答えるすべのない問いではあれども問い続けられねばならない。なぜなら、それはオウム事件が単なる「カルト」が起こした異常な事件で済まされないからである。一時は公称で信徒数が15,000人を超えた大教団だったオウム真理教。その人数の多さも、また被害者の多さもさることながら、信者の中に高い教育を受けたエリートとみなされるべき若者が多く含まれていたことも、当時話題となった。なぜ将来を約束されているかのように見える彼らがオウム真理教に深入りしたのか。大澤真幸が述べているように、「オウムが、あるいはオウムのなものが、私自身もそうでありうる可能性を示している、という自覚」<sup>2)</sup>、つまり心理的な近さに対する恐怖感を持ったものは多かったと思われる。また、連日の報道で私たちの認識の地平は当時、オウム真理教に事実上占拠されていたと言っても過言ではない。その頃のマスコミは警察官、自衛隊、マスコミ関係者にも多数の信者がいるという憶測にも似た「情報」を流してもいた。心理的な近さに加えて物理的な近さの感覚が、真実味を持って恐怖感を煽ったのである。

われわれの多くは、上九一色村や波野村といった田舎で閉鎖的な共同体を形成する教団に、攪乱要因となる「外部の他者」を見た。と同時に日本の人口の0.01パーセントの規模にあたる教団を人々が恐怖したのは、外部にいるはずのその他者が、われわれ自身のすぐ脇に、隣の部屋や隣の座席にいるかもしれない、という感覚をもったからではないか。<sup>3)</sup>

大澤はこのように書いているが、もしかしたら順序が逆である可能性もある。つまり、すぐ脇にいる近い存在であることを感じたから、「外部の他者」として規定し排除しようとしたのだ、と。

つまりこういうことである。「他者」として切り捨て、社会を無毒化しようとする姿勢は当時から存在したが、オウム真理教事件から時間が経つにつれてその姿勢は強まっているのではないか、それが事件を風化させる推進力となっているのではないかということだ。当時の社会が抱いた「近さへの恐怖」を今の私たちは維持しているだろうか。名称を変えた教団の施設の近隣に住む住民などを除き、ほとんどの場合答えは否であろう。それは、すでにオウム真理教にはある種のレッテルが貼られてしまっているからである。しかもそのレッテルはどこか滑稽味を帯びたもので、事件を「狂人」である教祖の「妄想」の結果と位置づけ、かつ信者たちを「被害者」として安全化している。かつて私たちが感じたような恐怖感はそのことから失われ、代わりに麻原彰晃という一人の人物だけが巨大な悪者、あるいは狂った妄想家として社会から抹殺されようとしているのである。

森達也は、団体規制法、いわゆるオウム新法によって国家統制を強める法律があっさり成立したことについて、2001年に次のように述べている。

根底にあるのは、剥きだしとなった「他者への憎悪」だ。様々に加工され装飾された憎悪が、世論や良識などの衣を纏いながら、メディアや司法や行政、そしてそれらの基盤となる市民社会という共同体の、重要な規範を無自覚にコントロールし始めている。／すべては地下鉄サリン以降なのだ。／思い出して欲しい。僕らは事件直後、もっと煩悶していたはずだ。「なぜ宗教組織がこんな事件を起こしたのか？」という根本的な命題に、的外れではあっても必死に葛藤をしていた時期が確かにあったはずだ。事件から六年が経過した現在、アレフと名前を変えたオウムの側では今も葛藤が続いている。でも断言するが、もうひとつの重要な当事者であるはずの社会の側は、いっさいの煩悶を停止した。<sup>4)</sup>

ここで森が指摘する「憎悪」はすでに私たちの中から消え失せているのではないだろうか。それはどこへ行ったのか。なぜ消えたのだろうか。つまり、今問うべき質問はこうである。なぜ私たちはあれほどまでに強いオウム・パニック、もしくは「オウム・フィーバー」<sup>5)</sup>とも言える状態になったのか。なぜ連日の報道を貪るように消費したのだろうか。「憎悪」は反転して、私たちがいかにオウム問題に惹きつけられたことを示しているが、何が私たちをそこまで惹きつけたのだろうか。そして、何が現在の事件の風化をもたらしたのか。オウム真理教や事件の真相を問うことも大事だが、ある程度の推論は可能だとしても「真実」に到達することはおそらく不可能である。万が一、麻原彰晃が事件の背景や自己の関与について、あるがまま語り始めたところで、すでに時が経過し、記憶が失われ、被害者・加害者ともに事件を意味づける行為を行ってしまった後となつては、実態は変質してしまっている。むしろ今、私たちはオウム真理教事件に私たちが何を投影し、それをどう語り、どう結論づけ、どのように葬ったかという点、日本の「一般市民」やその代表がどのようにオウム真理

教事件を整理したのかという点を問う必要がある。

オウム真理教事件についての分析記事は玉石混交で膨大な数に上る。中でもサリン事件直後で報道が膨大な量であった1997年までの雑誌報道については池田太臣の論文「『闇』の解読——雑誌報道のなかの『オウム真理教』——」<sup>6)</sup>に詳しく分析されているので、ここでは主に少し時間を経過してから創造されたオウム関連の作品、特にフィクションや映画、ドキュメンタリーなどの文化作品に注目していくこととする。瞬発力重視の雑誌報道記事よりも、より熟成させ昇華させた作品にあらわれるオウム像は、上記の問いへのヒントを与えてくれるだろうし、オウムの物語化を分析することを通して、私たち自身の社会について見えてくることがあると考えるからである。断っておくが、この論考はオウム真理教の教義の価値判断をしたり、オウム事件の真相を明らかにしようとしているのではない。ベクトルは逆向きであって、オウム事件の描き方から、描く側のこと、つまり現代の私たち自身の姿を見ようとするものである。

大きく分けて、オウム真理教事件を巡る語りの方角には3つある。仮に、それらを「劇画的陰謀史観型語り」、「麻原集約型語り」、「周縁へのずらし型語り」と呼び、分析していくこととするが、まず指摘したい点はそれらの語りが基本的に、オウム事件を社会問題として位置づけ、宗教問題としては扱っていないことである。池田は「オウム事件の一連の報道をみていて、まず、気づくことは、オウムに関する事件が宗教問題としてとらえられていないことである」<sup>7)</sup>と指摘しているが、これから分析する3種類の語りにおいても、もっぱらオウム真理教は麻原の詐欺であって、宗教ではないというスタンスが取られ、そうでない場合は宗教問題には触れずに済ませている。池田は、公安調査庁がオウム真理教への破防法適用を巡る論議の中で、同教団のことを「麻原彰晃を独裁的主権者とする祭政一致の専制政治体制を我が国に樹立することを目的としている」と断罪したことについて、「この公安の解釈には、彼らの「破防法適用」という利害が大きく作用していると考えられる。公安は、破防法の適用要件にかなうように、オウム像を加工する必要があったからである」<sup>8)</sup>と述べている。オウム問題を宗教と切り離そうとする論調は、同様に何らかの企図によるものであるだろう。それは何なのか。「教義の問題」としてとらえることへの強い感情的な反発が存在すると考えた方がよい<sup>9)</sup>という池田の指摘は的を射ていると考えられるが、この問題については追って検討することとする。

### 劇画的・陰謀史観型語り

この種の語りの代表的なものとして、2002年刊行の一橋文哉の『オウム帝国の正体』がある。これは池田が分析する事件当時の雑誌記事とほぼ同じ「あらゆる物語の氾濫」<sup>10)</sup>の傾向を示している。実際にこの作品の場合、サリン事件が起きた1995年から翌年まで連載された雑誌記事に加筆されたものであることもその一因であろう。その内容は、オウム真理教事件の裏には実は糸を引く教団関係者以外の人物たちがいるというものである。その人物た

ちとして挙げられているのが、ありとあらゆる「怪しい」団体、即ち日本の政財界の大物、暴力団、ロシアの KGB、北朝鮮の工作員、別の宗教団体、外国人マフィアである。彼らはオウム真理教が持つ莫大な資金に目をつけ、武器を売りつけたり、細菌ガスを開発させたりしたのだが、公安や警察も彼らの影響下にあるために真相は隠された、その証拠が一連の未解決事件だというのだ。そして表面に出て利用されたオウム真理教関係者たちだけが割を食ったというのが、彼の描く「物語」である。CIA 関係者とされる人物の言葉に、一橋のオウム像が端的に表れている。

我々は外交や経済戦略上、日本に拠点と人脈を作りたいと考えたロシア政府が、資金と人員が豊富なオウム真理教に目を着け、自国の国益を満たすように操ろうとした可能性が高いと見ています。それで、軍部や元 KGB の関係者らを通じ、二束三文の旧式武器を高額で売り付け、武装化を煽りながら、巧みに反米思想を植えつけたというのが真相ではないでしょうか。何しろ、オウム信者たちはマインドコントロールされやすいですから、KGB の手に掛ったら赤子の手を捻るようなものでしょう。<sup>11)</sup>

これがフィクションであるかノンフィクションであるかは定かではないが、ここに見られるのは、オウム真理教との比較において、オウムの周りの「魑魅魍魎たち」<sup>12)</sup>の方をより強力な悪と位置づける態度である。「“オウムの闇”を暴くのが本書の狙い」<sup>13)</sup>とあるが、彼が「闇」と呼ぶものが、実はオウムではなく、オウム以外の何か、であることは明らかだろう。だが、その何かの正体を「暴く」ことが、この作品の目的とも思えない。なぜなら、どの「悪」のコネクションも結局はつきりと描かれることなく（暴くと死の制裁が待ち受けていることが示唆されて）終わっているからである。この作品はむしろ「闇」を一層濃くする方向性を持っているのである。要するに一橋の語りは、これらの「悪」の不気味さや謎を保持することによって、別の目的を達しているのではないだろうか。一橋はあとがきに次のように述べている。

思い込みの激しい小市民が起こした犯罪が、一連のオウム事件ではないだろうか。／そうとでも思いこまなければ、一流大学出のエリートたちが、いかにも胡散臭そうな麻原の荒唐無稽なホラ話を信じ、あの汚らしい男が入浴した後の水をカネまで出して飲んだり、無差別大量殺人兵器のサリンを製造してバラまいたことを、とても理解できないからだ。[中略] こんな馬鹿者どもが大それたことを仕出かす時には必ず、裏で巧妙に糸を操り、金儲けや自分の野望を遂げようとする奴がいる。<sup>14)</sup>

この文章にあらわれているように、一橋の語りにおいて、麻原とオウム信者たちは「小市民」「馬鹿者ども」と揶揄され、一連の事件はそんな彼らの「仕出か」した「大それたこと」、

その宗教は「荒唐無稽なホラ話」として片付けられている。つまり、より強力な「悪」を引き合いに出すことによって、オウムという当初大きく思われた「悪」を矮小化しているのである。

このような彼の語りの一歩の標的となっているのは、教祖麻原彰晃である。一橋は逮捕された直後のヘッドギアを着けた麻原の写真を掲載した頁に、次のように書いている。

まずは、この情けない表情を見て頂きたい。[中略] 麻原は「隠れ部屋」と称する天袋のような狭い場所で、一千万円ほどの現金を腹に抱え、身を縮めるようにして震えながら、寝そべっていた。／そのくせ、警視庁の取り調べ室では、取調官に盛んにゴマをすり、留置場では丼飯をきれいに平らげた後、瞑想と称して、大の字になって高いびきをかいて熟睡する。そこには、犯した罪に対する懺悔はもとより、教祖のカリスマ性も、人類救済を叫ぶ革命家としての矜持も、自分の家族や信者たちの行く末を思いやる気持ちさえもない。「自己中心的で凶暴な反面、単に強欲で小心な詐欺師に過ぎない」／ベテラン捜査員たちがそう口を揃えて罵る麻原が、オウム事件の真相を解き明かすキーパーソンとは、とても思えない。<sup>15)</sup>

麻原彰晃を宗教性の欠片もない、強欲で世俗的な小心者とする恣意的な情報解釈行為がここに見られる。また、次のロシアの武器商人のインタビューが掲載された箇所でも、さらに麻原は矮小化され、オウム事件は宗教問題ではなく、「カネ」を巡る問題として提示される。

——でも、荒唐無稽なハルマゲドン構想では、商売に不安があったはずだ。

「世界は広い。無茶苦茶なことを言っている人はたくさんいるよ。肝心なことは、そんな狂人たちが権力やカネを持っているかどうかなんだ。湾岸戦争だって、先進国の軍需産業が儲けるためだったと言えなくはない。米国は力と知恵と資金を持っていたが、アサハラはカネしか持っていなかっただけさ」<sup>16)</sup>

このように麻原彰晃を貶め、より大きな「悪」を描くことは、結果としてオウム事件そのものの重大性や恐怖を遠のかせる。一橋の語りのみならず、一連の陰謀史観型語りには以上のように、オウム真理教そのものを宗教から切り離して矮小化し貶める効果があると考えられる。それが今日私たちの持つオウム真理教の「滑稽な」イメージの創造に寄与していることは確かであろう。だが、もう一方で、それらの語りは、しばしばあまりにも荒唐無稽かつ証明不能であるため、結局どれも圧倒的な真実味を帯びるには至っていない。怖そうなイメージのものを集めて、一つに混ぜ合わせたかのようなこれらメガロマンニアの物語は、オウム真理教に特徴的な虚構性を鏡に映したような虚構性を晒し、矮小化する対象と運命を共にする自己侵食的なものと言えなくはないだろうか。オウム真理教側が主張した陰謀説やハルマ

ゲドン予言、または麻原の空中浮揚写真と同様に、どこか失笑を誘う物語となっている。オウムの物語を相対化したこれらの物語は、自らも相対化されてしまったのだ。しかし、このような自己侵食的な陰謀史観は、オウム教団や一部のジャーナリスト、作家だけが持つものではなく、現代の私たちが共有するものではないかと大澤は分析する。

われわれは、この陰謀史観を一片の現実性ももたないものとして嘲笑する。しかし、「われわれ」のオウムに対する眼差しもまた、一種の陰謀史観の構成を取ってきたことに思い到るべきである。[中略] 陰謀史観とは、社会に許容し難い反秩序を見出したとき、その反秩序の原因を直接には見出し難い外部の他者（の邪悪な意志）に投射する[押しつける]ことで、その社会の現状を歴史的に説明しようとする態度である。[中略] われわれとオウム教団とは、互いに相手を、そのような他者（の温床）と見立てることによって、まるで合わせ鏡のように妄想を相互に投射しあっていることになる。<sup>17)</sup>

大澤が指摘していることの一つは、オウムと「われわれ」が正反対の存在ではなく、非常に似通っているという点である。村上春樹も同意見を表明している。

私が言いたいのは「私たちがわざわざ意識して排除しなくてはならないものが、ひょっとしてそこに含まれていたのではないか」ということだ。/[中略]「こちら側」=一般市民の論理とシステムと、「あちら側」=オウム真理教の論理とシステムとは、一種の合わせ鏡的な像を共有していたのではないかと。<sup>18)</sup>

言い換えれば、「われわれ」はその「似ている」という事実を否定せんがために、相手を他者として見立てようとメガロマニアな物語を創造しているのかもしれない。その結果、逆説的に「われわれ」の世界とオウムとの類似が露呈しているということだ。陰謀史観のオウム報道が「さまざまに焦点がブレている」と指摘した上で「こうしたさまざまな物語を呼び込んでしまうのは一体なぜなのか」<sup>19)</sup>と問う池田も、それが時代の産物であるという見方を示している。「冷戦」あるいは「東西の対立」といった「決定的な物語の枠の消失と、あらゆる物語の氾濫の時代」<sup>20)</sup>である現代を映しているというのである。

実際のところ、オウム真理教の主張や行動はしばしば「劇画的」と称され、その虚構性が指摘されてきたが、これはサリン事件からさらに時間が経過した現代の日本社会にも指摘されている点である。例えば、大澤は80年代後半から現れた若者風俗「オタク」とオウム真理教を結び付けている。オウム教団の世界観は、世界最終戦争やコスモクリーナーなどの用語を含めて『宇宙戦艦ヤマト』や『アキラ』『美少女戦士セーラームーン』などのマンガやSFの世界と一致しており、「これらのマンガの物語を演じているように見える」<sup>21)</sup>。彼らは自分たちだけに通用する言語を使い、超能力やホーリーネームや国家に擬した組織などを含

め、外部の社会とは異なる価値体系を作り上げたのだが、これは現実よりも虚構の世界に耽溺する「オタク」と同じではないか。そして現在、「オタク文化」は一般化しつつある。「セカンドライフ」という虚構の世界や2ちゃんねるはオタク以外の人々の間にもすっかり浸透している。また、秋葉原で有名になったコスプレや、コンピュータゲームの人気はますます隆盛の感がある。

池田は2008年3月に行われた筆者とのインタビュー<sup>22)</sup>の中で、オウムを「日本社会のネガティブ」である「オタク」的要素が高く、当時の若者たちが惹きつけられたことに理解を示す。修行して特殊な超能力を得、修行の達成度に従って着用する衣服の形や色が変わるというオウム真理教のあり方は、次々にステージを上げて武器や特殊能力を身につけて成長していく『ドラゴンクエスト』のようなコンピュータゲームとなんら変わらないというのである。「オタク」集団に属する若者たちが嬉々として楽しんでいるように、オウム教団の信者たちの様子を面白く感じたものもいたはずであると。

オウム信者たちがこういったゲーム的修行によって目指す「解脱」は「身体の局所性を克服しようとする」欲望によって支えられているとする大澤は、それが「脱身体化」や「身体の情報化」ではなく「身体の恢復」であると主張する<sup>23)</sup>。しかし、麻原のエネルギーを取り込むことによって、麻原と直接物理的距離を越えて一体化しようとする彼らの方向性は、信者自身の本来の身体の「恢復」や身体能力の開発とは異なっていると言えるだろう。それは異なる名前のキャラクターとして武装し、超能力を身につけて成長していく「身体改造」あるいは「変身」であり、そのエネルギーは偏在的電子エネルギーに似ている。「セカンドライフ」内部にいるキャラクターは、コンピュータの外にいてそのキャラクターを動かしている本人でもあり別人でもあると言えるが、オウム信者の場合は内部のキャラクターを身体化しようとするのである。後述する映画『カナリア』の中で、オウム真理教そっくりの作中宗教団体ニルヴァーナから脱した元信者のセリフがこの分析を支持している。

「おれはニルヴァーナで修行することで、この自分を完膚なきまでにつくり変えて、いつか世界そのものを変えることができると信じていた」<sup>24)</sup>

オウムの修行が、自己の肉体を保持しての身体改造や身体能力の恢復に留まらず、「完膚なきまでにつくり変え」る「変身」に近いことを、このセリフは認識している。

しかし、このように虚構が現実を凌駕するあり方は、オウムだけに見られるのではない。オウムが先行したかもしれないことは、今や一般化していると言ってよい。ネットが媒介しての殺人、ビジネス、いじめなどが日常的に行われている今、「現実と虚構との価値配分が逆転し、虚構の方に圧倒的な重要性が置かれる」<sup>25)</sup> オウム真理教のあり方はもはや大した違和感をもたらさない。20世紀末のオウムを巡る陰謀史観型語りには、現実と虚構がないまぜになり全てが相対化される時代が到来しつつあることへの危機感が、あらわれているのか

もしれない。

そしてオウム真理教という宗教そのものが、その危機感に対応するものだった。大澤はオウム問題を宗教として考察している論者の一人である。彼は見えやすい敵や理想が存在した時代の新興宗教は現世利益を約束するものだったが、オウム真理教のような新宗教の中でも後発の「新新宗教」は、現世離脱を救済の道として提示すると指摘し、次のように述べる。

要するに、オウム真理教は、新新宗教の「理念型」的な代表なのである。そうであるとすれば、オウム真理教の例外性は——あえてテロまで引き起こしてしまうような過激さを備えた例外性——、それが時代的な必然の外部になったことに由来するのではなく、むしろ逆に、その必然をあまりに純粋に体現し過ぎたせいでもあるかもしれないのだ。<sup>26)</sup>

オウム真理教自体も、陰謀史観型の混乱した語りも、共に焦点をなくし全てが相対化した迷える社会の「イデオロギー的な「白紙状態 tabula rasa」<sup>27)</sup>の産物であり、そこからの「救い」を虚構的な世界観の中に求めようとしているのである。その意味において、両者は互いの鏡像と言えるのである。

#### 麻原集約型語り

前項で考察したように、わかりやすい物語を消失した現代という時代の中で、「語ること」には相当の困難が伴う。この点について、池田は次のように述べる。

ひとつとは、不可解な部分を「不可解なもの」として放置することができない。ある「物語」を作り出して、なかば「無理やりに」納得しようとする。この「物語への強い欲求」は、人間の宿痾である。そして、その欲求にこたえなければならないというのが、ジャーナリズムの宿命である。だが、この欲求にこたえ、自らの宿命を全うすることが難しい時代になった。[中略] われわれは、その多くが共有しているような「大きな物語」を消失してしまったからである。今後、あたらしい「物語」が登場するのか。それとも、ジャーナリズムは、説明する努力を放棄して、ただ「事実の垂れ流し」だけに従事するのか。<sup>28)</sup>

ここではジャーナリズムについて語られているが、フィクションや映画などの語りについても、同様のことが言えるだろう。陰謀史観型語りには陥らず、不可解さを受け止める語りというのはなかなか見られない。実際、オウムを巡るもう一つの代表的な語りには、「麻原主義」<sup>29)</sup>とも呼ぶべき様態が挙げられるが、これも陰謀史観型語りとは別の意味で反動的・感作的で、「サリン事件の動機などの不可解さを、結局は、麻原教祖の不可解さに還元すると

いう形<sup>30)</sup>を取る。池田によると、特に事件から少し時間が経ってからの報道においてよく見られる語りである。その特徴は「麻原というみるからに奇矯なキャラクター<sup>31)</sup>」を前面に押し出すことによって、事件をわかりやすく説明しようとするものである。一人の人間の精神と肉体にオウム事件の複雑さや不可解さを負わせ、「オウム事件の「単純化」<sup>32)</sup>」を図っているのだ。では、具体的にはどのような「単純化」が作動しているだろうか。二つの例を検証することにしよう。

一つ目は、2001年刊行の新堂冬樹の『カリスマ』である。この物語では、岡崎平八郎という男性が神郷宝仙と名乗り、宗教法人「神の郷」を率いている。文末には「本作品はフィクションであり、実在の個人・団体などとは一切関係がありません<sup>33)</sup>」と書かれているが、「百八十センチ、百キロの、力士並みの巨体を紫の作務衣に包んだ神郷は、モスグリーンの三人掛け用の応接ソファで、右足首を左太腿に、左足首を右太腿の上に乗せる結跏趺坐の体勢で座っていた<sup>34)</sup>」とあるその教祖の容貌は麻原彰晃を思わせるものであるし、1995年3月20日におきた「マウナ政教の惨劇後」の話という設定もオウム真理教を意識したものである。また、自我や俗世の事物への執着を捨てさせ、性行為を禁じる教義や隠し部屋の存在など、この物語がオウム真理教をモデルにしているのは疑義がないだろう。

では、そこでは教団および教祖はどのように描かれているか。神郷宝仙は徹底的に自覚的に詐欺師である。彼には何の宗教性もなく、ただひたすら世の中の不幸な人々を言葉巧みにたぶらかし、自分の宗教団体に財産を投げ出させている。「カモにもなれない貧乏人の相談者には用はない<sup>35)</sup>」と語る神郷は、カネの亡者でとことんまで世俗的である。彼は催眠商法と同じ手法を使って人を信用させた後は、様々なテクニック、例えば「功德と罰のレトリック——自分に従えば徳を積む者として救われ、従わねばカルマを増大させる物として地獄に墮ちる<sup>36)</sup>」を使って彼らをマインドコントロールする。そして不満分子は教祖に心酔している弟子に肅清させるのである。その描写がことさらに穢いことは注目に値する。「浄化された神水——じっさいは、糞のあとに尻を拭いたり、鼻糞をほじった手で搔き回されただけの水道水にすぎない。だが、自分を神の化身、救世主と崇める教徒達は、大腸菌が泳ぐ水道水を、神の手によって浄められ、カルマを解消する効験のある靈験あらかたかな水と信じて疑わない<sup>37)</sup>」。

ここで、教祖から徹底的に宗教性が剥ぎとられ、矮小化されていることがわかるが、その一要素として巨大な性欲が描かれている。「これまでの十年間で、在家教徒、出家教徒合わせて五、六百人の女性教徒と寝た」と豪語する主人公は「自分の行動に、靈的な意味合いはなにもない。教徒の間を歩くのも、頭を叩くのも、エネルギー注入が目的ではなく、己のペニス注入する相手を探しているだけだ。だから神郷が頭を叩くのは、修行に熱心な髪にフケをへばりつかせた薄汚い男性教徒よりも、色白美人の女性教徒が圧倒的に多かった<sup>38)</sup>」と言う。ここでも身体的な汚穢のイメージが喚起されているのがわかるだろう。他の誰も入室が禁じられている「天上の間」で、神郷は「睡眠、暴飲暴食、喫煙、セックス、競馬鑑

賞」<sup>39)</sup>に興じるのだが、その描写も同様である。「床に散乱するエロ本に裏ビデオ、ブランドのボトル、サラミソーセージの食べかけ、脱ぎ捨てられたブリーフ」<sup>40)</sup>。ここでは肉食と肉欲がともに主人公の欲の強さを示す記号として使用され、身体的汚穢のイメージと相まって、世俗性・不浄を強調するイメージを作り上げている。

このように、この物語において、教団の犯罪はすべて巨大なエゴを持った詐欺師に起因するものとされ、教徒たちは騙され洗脳された被害者として消毒されている。また犯罪自体も、強欲で小心な教祖が引き起こした場当たりの、無計画なものとして描かれ、矮小化されている。徹底した「麻原主義」がそこには見られるのである。教祖の「異常さ」、すなわち「異常な(性)欲」と不浄性、愚かさ、拝金主義など全て教祖に起因するものが、あのような不可解で事件を生み出したのだと、この物語は解説する。

では、そのような人物がなぜ現れたのかという問いについても、この物語はわかりやすい説明を提供する。それは「トラウマの物語」である。神郷は幼いころにカルト信者であった母が父を殺して自らも割腹自殺を遂げる現場を目撃しているという設定である。このときの「トラウマ」がもともとは明るい少年だった彼をこのような「異常な」人間に変えたというのだ。

どのくらいの間、泣き続けていたのだろうか。声も嗄れ、涙も涸れた少年は床を這いずり、佐代子と洋一郎の躰から溢れ出た血の海に泳ぐ<sup>メシア</sup>あいつの写真を手に取った——握り潰した。／少年は悟った——神は残酷な冷血漢だということを……。／少年は誓った——両親を奪った神への復讐を……。<sup>41)</sup>

メシア——開祖でも教祖でもだめだ。メシアでなければ、意味がない。／神の名を騙り、ひとりでも多くの者の魂を我が物とし、汚してやりたかった——あいつが、そうしてきたように…。<sup>42)</sup>

つまり、ここでは2段階の無毒化が行われている。教団全体と教団の行った犯罪は、すべて教祖の奇矯さに起因するものとして無害化され、一方で教祖が途轍もない「異常性」を帯びて提示された。次に教祖も結局、幼児期のトラウマが原因でそうなっただけの哀れな存在で、本来は「異常ではなかった」としてその「異常性」は回避されているのである。不可解な謎はこうして単純明快なトラウマの物語への回収されるのである。

物語の中ではある人物が次のように解説している。

「会長の調べによると、宗教団体、とくに、カルト教団と呼ばれる組織の教祖が、幼少時代に受けた両親からの虐待などによる心的外傷、つまり、トラウマの影響を受けている場合が多いと判明しました。神郷も例外ではなく、幼少時にカルト教団に洗脳された

母親が、己の目の前で父親を殺し、自殺するという悲劇を体験しています。この悲劇が後の神郷の人生に大きな影響を与えたのは想像に難しくなく、加えて彼は、己の育った家庭環境、中卒という学歴に激しいコンプレックスを抱いています。このコンプレックスというのはトラウマと表裏一体で、各教団の教祖に共通しています。』<sup>43)</sup>

このようなトラウマの物語は、わかりやすく説得力があるが、それ故に極めて還元主義的である。池田は「大きな物語」に代わる「あたらしい物語」の可能性として、「心の闇」という言葉を出し、「この一種の「心理学主義」が、今後、どれほど優勢になっていくのかは、興味深いところである」<sup>44)</sup>と述べているが、この物語で見えてくるのは「心の闇」小説も一つの「単純化」であり「一種の「思考停止」」<sup>45)</sup>を招くものであるという事実である。

もう一つの作品は、2002年刊行の野沢尚の『魔笛』である。この物語における教団というのは「メシア神道」で、教祖は信者から「聖仙」と呼ばれる坂上輪水という女性である。そして渋谷のスクランブル交差点でテロを起こすのは、聖仙に後継者として可愛がられた語り手、照屋礼子。彼女は元々公安から送り込まれたスパイだったのだが、なぜか聖仙に取り込まれてしまい、大量殺戮を行う。聖仙と照屋の不可解なつながりの理由をこの物語は狂気、それも多分に性的な狂気に求めている。照屋礼子は実は児童期からのレズビアンで、自分を拒絶した小学校の女性教師を殺害している。そして聖仙は、その照屋礼子の「トラウマ」を自在に操ることができる。ここでも「異常な性欲」がキーワードになっていることがわかる。この物語においては、その「異常性」は、「女性身体化」されて説明されている。

彼女〔聖仙〕には子供を産み落とすことに最大の欲望がある。セックスの快感や母性や単なる付帯要素にすぎない。その証拠に、生まれた後の子供に対する愛情は恐ろしく希薄だった。／出産にこそ神性の源があり、十月十日を経て「神座」と呼ばれる教団本部内の分娩室で創造主となる瞬間、自分が神であると実感し、確認し、恍惚とする。<sup>46)</sup>

「お前の卵子を子宮に取り込んで育てたい、お前の血を受け継いだ生命をわたしの肉体によってこの世に放出したい」／これこそ人間と人間をつなぐ最大級の愛情だと私は思った。／「わたしの血と肉によって、愛するお前の命を育てたい」／聖仙は私にそう囁いた。私の卵巣から旅立った一個の細胞が、聖仙の子宮に安住の地を見つけ、そこでたゆみのない細胞分裂を繰り返し、やがて鼓動を打ち始める新しい命を夢見た時、私は涙ぐみそうになった。／思えばそれが、帰依の瞬間、だったのかもしれない。<sup>47)</sup>

この語りは、この2人の濃密なレズビアン女性同士の関係性を事件の背景に置く。そして照屋礼子は常に聖仙の説法の声を録音したテープを聞いていて、その声が「魔笛」<sup>48)</sup>のように彼女を「忘我状態」<sup>49)</sup>にするとあり、彼女が操られている状態にあることが示唆されるた

め、やはり根本的な理由を教祖に求める「麻原主義」がここに見えるだろう。

ここでの「単純化」は、『カリスマ』のそれとは少し異なり、作者にとっての他者であるレズビアン女性にすべてを押しつける形を取っている。そこに男性側の古典的な出産恐怖やレズビアン差別を見ることもできるだろう。異常なものを「女性の身体に起因する問題」へと他者化し、自己から排除する仕組みがこの物語では機能し、事件の「単純化」と「思考停止」を結果としてもたらしているのである。

これらの物語にあらわれているのは、オウム事件を巡る報道で実にしばしば、麻原の性に関する情報（麻原彰晃と女性信者たちの関係や、松本知子や石井久子という女性幹部に次々に子供を生ませているなどといったこと）がセンセーショナルに取り上げられたのと同じ仕組みである。事件の背景に、麻原の「異常な性欲」を置き、さらにその原因として幼少期に彼が経験した「トラウマ」と「コンプレックス」があるとする。弱視であるのに盲学校に入れられ、「親に捨てられたようなもので、はじめのうちは毎晩フトンのなかで泣いた」<sup>50)</sup>という経験や、貧しかったこと、東大受験に失敗したことなどがまことしやかに書かたてられた。これにより、再びわかりやすい「心の闇」という言葉が用いられ、「単純化」が行われているのである。

ここで、「異常な性欲」というものに社会が強い拒絶反応を示していることがわかる。そこに見えるのは規範的異性愛主義であり、それ以外の同性愛などを含む関係性を「異常」と決めつけ、排除しようとする態度である。『カリスマ』では性的なイメージと汚穢が嫌悪感を引き起こすように結び付けられ、『魔笛』では女性の出産のイメージがことさらにグロテスクに描かれ、殺戮場面の血のイメージと結び付けられている。つまり、ここから見えてくるのは、オウム真理教事件、あるいは教団の実体ではなく、私たちの社会に存在するセクシュアリティへの恐怖なのである。

もう一つ、2002年刊行の佐木隆三の『大義なきテロリスト——オウム法廷の16被告』についても言及しておきたい。これはジャーナリストの佐木の法廷レポートであるが、タイトルにもあるように16人のオウム教団幹部らについて詳細に検討しているため、一見すると次の項で検討する「周縁へのずらし型語り」のように思われる。ところが、実際は、序章で麻原彰晃について語るなかで佐木はオウム事件を「オウム真理教の組織犯罪は、教祖の金銭欲に発したものであり、きわめて薄汚い」<sup>51)</sup>と断じている。16人の被告たちは何らかの形で彼の被害者であるという姿勢をとる隠れた「麻原主義」なのである。

麻原彰晃を糾弾する文言は、この序章にはじまって、本編の16人のレポート内にも散見される。一橋の語りと同様に、佐木は麻原逮捕時のイメージを喚起して「上九一色村で逮捕された麻原彰晃は、天井の隠し部屋に潜んで、約一千万円の札束をかかえていた。地下鉄サリン事件の首謀者として起訴されると、法廷で「弟子たちが勝手にやった」と否認して、裁判を引き延ばすことに汲々としている」<sup>52)</sup>と書く。また麻原の主張を「稚拙な無罪主張」<sup>53)</sup>と表現するなど、カネの亡者で責任を弟子に押し付ける卑怯者というイメージは、麻原を矮

小化するのに便利なものようだ。

さらに佐木は、麻原が暴力的であったことなどに言及、また先に引用したような「トラウマ」体験も記録しているが、その経歴描写は、傷害罪で罰金一万五千元を命じられたとか、薬事法違反で罰金二十万円だとか、処方箋による調剤報酬の不正請求で保険料六百七十万円の返還を国から命じられたとか、「お布施百万円の「血のイニシエーション」で、自分の血液を飲ませはじめた」<sup>54)</sup>など、カネにまつわるものが多く、著者が麻原を徹頭徹尾、詐欺師として扱おうとしていることがわかる。

また16人の教団幹部たちのレポート内では、しばしば彼らが法廷で泣いたり絶句する様子が描かれる。例えば次の記述を見てみよう。

「あなたは、それでもグルなんですか。サリンによる被害者のことを、どう思っているのか。あなたは自分の公判が長引くことに安住して、現実から逃避しているとしか思えない。あなたは前回の公判で『地下鉄サリン事件は、井上嘉浩と村井秀夫が勝手にやった』と言いました。あなたには、弟子を止める力もなかったんですか。そんなグルに、われわれはついて行ったんですよ。しっかりと現実を見てください。これ以上、過ちを犯さないでください」／おそらく豊田亨は、言葉を失って在廷できない廣瀬健一に代わって、発言する気になったのだろう。そのことを思うと、いっそう廣瀬が憐れでならなかった。<sup>55)</sup>

利用され悔悟の涙を流す「憐れ」な弟子と対照的に、ふてぶてしく沈黙し責任逃れをする麻原という構図が浮かび上がる。ここでも事件が「単純化」され、ひとりの人間に全てが押し付けられている様子が見られるのである。

### 周縁へのずらし型語り

オウム真理教事件を、中心から少し離れた視点で見ようとする動きもある。その代表的なものが村上春樹の『アンダーグラウンド』(1997)と『約束された場所で——underground 2』(1998)である。前書の「はじめに」の章で村上はこの書を書いた理由について次のように語っている。

「被害者」一人ひとりの顔だちの細部を少しでも明確にありありと浮かびあがらせたかったからだ。そこにいる生身の人間を「顔のない多くの被害者の一人(ワン・オブ・ゼム)」で終わらせたくなかったからだ。[中略] そのような姿勢で取材したのは、「加害者＝オウム関係者」の一人ひとりのプロフィールがマスコミの取材などによって細部まで明確にされ、一種魅惑的な情報や物語として世間にあまねく伝播されたのに対して、もう一方の「被害者＝一般市民」のプロフィールの扱いが、まるでとってつけたみたい

だったからである。[中略] おそらくそれは一般マスコミの文脈が、被害者たちを「傷つけられたイノセントな一般市民」というイメージできっちりと固定してしまっていたからだろう。[中略] 「(顔のない) 健全な市民」対「顔のある悪党たち」という古典的な対比によって、絵はずいぶん作りやすくなる。／私はできることなら、その固定された図式を外したいと思った。<sup>56)</sup>

また、オウム真理教事件を「『裁判』という固定されたシステムの中でうまく文言化して、制度レベルで処理し」「過去という長持ちの中にしまい込みにかか」<sup>57)</sup> ろうとする社会の流れに歯止めをかけようという動機も表明されている。こうして地下鉄サリン事件に何らかの形で巻き込まれた「一般市民」60名のインタビューで構成されたのが『アンダーグラウンド』である。確かに村上の目的の一部は達成されている。この書を通して、これまで加害者側にばかり当たっていたスポットライトが被害者側に当てられ、加害者側の言葉ばかりが伝えられていたのが、被害者側の言葉が世の中に出たのである。しかし、市民たちに「顔」が与えられたというだけであって、「健全な市民」対「顔のある悪党たち」という図式が壊れるところまでは到達しなかったというのが本当のところではないだろうか。被害者側に向けられた視線は、オウム側の「魅惑的な情報や物語」を私たち側のそれで相対化することによって、結果として問題の重大さを薄め、オウム真理教の風化に貢献してしまったのではないだろうか。

だからこそ村上自身も『アンダーグラウンド』執筆後に、物足りない感覚を持ち、「『オウム真理教』と「地下鉄サリン事件」が私たちの社会に与えた大きな衝撃は、いまだに有効には分析されてはいないし、その意味と教訓はいまだにかたちを与えられていないのではないだろうか。この本を書き終えた今、私はそういう疑問を抱かないわけにはいかないのだ」<sup>58)</sup>と吐露しているように思われる。

前書の一年後の1998年に刊行されたのが『約束された場所で』である。この書ではよりオウム真理教に近い場所にいたが、事件とは直接関わっていないオウム真理教信者や元信者にインタビューを行っている。その中で浮かび上がってくるのは、「ごく普通の」信者たちである。言い換えれば、この書の中で信者たちは「あんな事件を引き起こした教団にしては」「普通化」「無害化」されている。信者たちがそのように自分たちを演出したか否かはともかく、私たちと何ら変わらない悩みを抱え判断力を持った存在として描かれているのである。つまり教団の「悪」はそのままに、信者たちが一部「善」に移植されているような状況である。前にも述べたようにサリン後の彼らの言葉は、すでに本人の中で合理化され動機づけされたものであるため、当時のそのままの記録とは言い難い。従って、彼らが語る入信動機や、麻原に帰依していた(している)理由は、また一つの「物語」として受け取らねばならない。確かに麻原や事件の「異様さ」を伝える「物語」とは異なるものである。しかし、「物語」の一つとしてそれらは共に相対化される運命にある。村上は、「私が目指したのは、

明確なひとつの視座を作り出すことではなく、明確な多くの視座を——読者のためにそしてまた私自身のために——作り出すのに必要な『材料』を提供することにあつた<sup>59)</sup>と書いている。その点には成功しているだろう。しかし、その結果は混沌、すべてが相対化され価値が減殺していく合わせ鏡のような世界なのではないだろうか。「こんなに多くの人を惹き付けるストーリー性とはいったいどんなものだったのか。そしてそのようなストーリーがどうして結果的にあれほどの致死性を帯びなくてはならなかったのか<sup>60)</sup>」という問いは、作品の最後にも答えが出ないままなのである。

2002年刊行の森達也著『A——マスコミが報道しなかったオウムの素顔』も、『約束された場所で』と同じく、信者たちに密着したドキュメンタリー形式をとる。信者たちに関しては、村上の作品同様「普通化」「無毒化」が行われていると言えよう。だが、この作品にはもう一つの視点があり、それはドキュメンタリー作家でこそ見えてくる「ドキュメンタリー形式の欺瞞性」や「ジャーナリズムの虚構性」を暴くものである。だからこそ、森は安易な説明や「単純化」に納得していない。

オウムについて君は何がわかったの？ と訊ねられれば、僕はこう答えるだけだ。／「何もわからないことがわかりました」／世の中のほとんどの現象は、「わかる」ものだという前提を僕らは持っていた。そしてこの思い込みが、僕らの日常を成り立たせてきた。曖昧に「わかる」ことで、僕らは平穏な日々を送ることができた。／オウムは、この思い込みと、曖昧さによって成立してきた日常を、抉りとして目の前に突きつける。[中略] 結論だ。オウムはわからない。<sup>61)</sup>

上の言葉からは、自己の紡ぎだす物語を予め相対化した上で、その意識と共に提供しようという姿勢が浮かび上がる。わからないことをわからないと潔く認め受け入れるという困難さを、この著者は引き受ける。それがオウム問題を歪曲しない一つの方法であるかもしれない。

もう一例、信者・元信者に着目した作品を見ることにする。それは2005年劇場公開された映画『カナリア』<sup>62)</sup>である。主人公は岩瀬光一という12歳の少年である。彼は、妹の朝子と共に母親に連れられてカルト教団ニルヴァーナに出家していた。そこへニルヴァーナが無差別テロを起こす。母親は実行犯の一人である。児童相談所に預けられた兄妹だったが、引き取りに来た祖父は、犯行的な光一の引き取りを拒否し、妹だけを連れ帰る。兄は児童相談所を脱走し、妹の奪回に向かう。ニルヴァーナがオウム真理教をモデルにしていることは明らかである（この作品のDVDのジャケットには、光一がオウム信者が着けていたのと同種のヘッドギアをつけて、こちらを見つめる写真が使われている）。

さて、この物語にははじめから「家族再生」というテーマが示されている。幼い兄・妹を連れて出家したときの母親は、子供たちに愛情深いまなざしを注いでいる。しかし「情愛と

いう執着を断つ」ために親子を分離させる教団の方針により、3人はバラバラにされ、やがて母は教団のためにテロリストとなり、最後には子供たちを置いて他の実行犯たちと集団自殺を遂げてしまう。教団により、家族が破壊されたという物語である。その後の光一の妹奪回劇や、彼を助ける元信者たちのグループとの「家族的交流」などは、壊された家族の再生劇と言える。元信者の一人はニルヴァーナのあり方を「大きな間違いだった」と述懐し否定する。そしてそのニルヴァーナの最も大きな罪は、家族を破壊したこととして提示されている。

大澤真幸は出家というシステムによって生来の家族と信者を引き離す宗教は、多かれ少なかれ「周囲の社会との軋轢」<sup>63)</sup>を引き起こすとした上で、オウムにみられる「家族の根源的否定」<sup>64)</sup>はより過激だと分析している。

坂本堤弁護士一家殺害事件が象徴的な意義を担うのは、その悲惨さゆえではない。この事件を報道する度に、テレビは、弁護士一家の幸せそうな典型的な核家族の映像を映し出す。オウムが憎まれるのは、この幸せな家族を抹殺したからである。おそらく人々は、この事件を通じて、家族的なものを根源的に否定しようとするオウムの志向性を直観したのであり、これに強い拒否反応を示したのである。<sup>65)</sup>

池田太臣もオウムが「家族という聖域」<sup>66)</sup>を荒らした可能性を示唆する。オウム真理教は、「家族」を共同体の理想として掲げるキリスト教系の宗教とは異なり、愛情で結ばれた共同体や家族を否定する。それどころか、それらの構成要素である個・自我も否定するのである。信者たちはそれぞれ教祖とのみ、直接つながることを求められ、それ以外のつながりは煩惱とみなされる。このオウムのあり方が、私たちの世界のタブーを侵したというのである。

だが、この映画の中でさえ、兄と妹を引き裂く祖父の存在がある。親子や兄弟の仲を引き裂くのは、何もカルト教団だけではない。光一と偶然知り合い、彼と共に旅をする少女・由希（12歳）もまた、母はすでに死に、父親からは暴力を受けており、まともな「家族」を持たない。また二人としばらく旅をするレズビアンカップルも、「家族」になれずに苦しんでおり、そのうちの一人は置いてきた子供のことで苦悩している。既に「家族」は壊れている。

もしかしたら、昔ながらの人間関係の濃い共同体は既に失われ、家族も崩壊しかかっているからこそ、私たちは必死で「家族」を聖域化しているのではないだろうか。オウムによるあからさまな家族の否定は、そんな私たちの社会の傷を抉ったのではないだろうか。「誰かが何かの拍子にその悪の蓋をぱっと開けちゃうと、自分の中にある悪なるものを、合わせ鏡のように見つめないわけにはいかない。だからこそ世間の人はあんなに無茶苦茶な怒り方をしたんじゃないか」<sup>67)</sup>という村上の言葉が的確である。

『カナリア』において再生される家族は従って、もともと無かったものである。それは無から作り出される「家族的な」人間のつながり、つまり元信者たちと老婆や子供たちのグループや、由希と光一と朝子の疑似家族なのである。物語は光一と由希、朝子が手に手を取って祖父の家から出ていく場面で終わるのだが、その前の場面で光一はなぜか突如毛髪が真っ白になり、祖父に対して「ワレはすべてを許すものなり」と告げている。こうして宗教的な意義を持たされた最終シーンの3人は、どこか「家族」という「信仰」を示すもののような気がしてならない。

これまで見てきたように、「陰謀史観型語り」にせよ、「麻原集約型語り」にせよ、そして「周縁ずらし型語り」にせよ、どこか麻原彰晃あるいはオウム真理教自体が作り出した「物語」に対して、対抗する物語作りを目指し、それに失敗しているものであるように思われる。村上春樹は、麻原彰晃という人物のことを、相対化した「物語」乱立時代の混乱期において「限定された意味あいにおいては、現在という空気を掴んだ希有な語り手だったかもしれない」<sup>68)</sup>と表現している。現代に生きる私たちは、他者の与えてくれる「物語」を求め、それに自我を譲り渡してしまう危機に瀕しているからである。

それはなにも洗練された複雑で上等な物語である必要はない。文学の香りも必要ない。いや、むしろ粗雑で単純である方が好ましい。更に言えば、できるだけジャンク（がらくた、まがいもの）である方がいいかもしれない。人々の多くは複雑な〔中略〕物語を受け入れることに、もはや疲れ果てているからだ。〔中略〕麻原彰晃にはそのようなジャンクとしての物語を、人々に（まさにそれを求める人々に）気前良く、そして説得力をもって与えることができた。〔中略〕それは「何かのために血にまみれて闘う攻撃的な物語だった」ということだ。<sup>69)</sup>

村上春樹は作家として、オウム真理教が差し出す物語に対して、「『こちら側』の私たちはいったいどんな有効な物語を持ち出すことができるだろう？ 麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語を、サブカルチャーの領域であれ、メインカルチャーの領域であれ、私たちは果たして手にしているだろうか？」<sup>70)</sup>と問う。

そして村上自身が作り出した対抗の物語が、『アンダーグラウンド』と『約束された場所で』であったわけだが、先に分析したようにこれらは必ずしも成功していない。オウムが差し出す物語に対し、それを相対化させる別の複数の視点を提供する物語群ではあった。だがそれらは結果として自らの物語をも相対化してしまい、それぞれの物語が薄められてしまった感がある。そしてそれは、オウム事件の風化をますます促進することになるのではないか。

一方、『カナリア』のような「家族の物語」には、対抗する「力」があるように思われる。しかし、既に失われた「家族」をオウムという宗教の家族否定から守ろうとするその物語

は、どこか図らずも「オウムの語り」を再生産している。血縁だけでは保障されない現代における「家族」関係を、この物語は最終シーンの突如として宗教的な転換により核家族的を模倣するようなイメージの3人に確保しようとしているのであり、むしろ「家族」の虚構性を明らかにもするのである。

### 異なる物語の可能性を求めて

これまで検討してきた語りは、ほとんどがオウムを宗教問題として取り扱ってはいない。『カナリア』においても、それは「家族」の問題とすりかえられた。陰謀史観型語りや麻原集約型語りにおいては、政治問題であり、また詐欺師・麻原という人物の個人的問題であった。これに対しては池田が問いを發している。

たんなる「詐欺師」が、毒ガスを撒いたりするのだろうか。そして、あれだけの人々が、その人物の大量殺人に手を貸したりするだろうか。「詐欺師」という俗的なラベルで考えようとする、いささか釈然としないところが残るのも確かである。<sup>71)</sup>

このように宗教として語ることを拒否する私たちの社会の態度は、それ自体が何らかの問題を指し示しているのではないだろうか。沼田健哉は次のように書いている。

村上[陽一郎]も考えているように、科学教（筆者註：科学的な現象のみを信じる近代ヒューマニズム社会における態度のこと）が唯一の正当な宗教ともみなすべきものであり、それ以外は非正当的であるという社会は、やはり問題があるといえよう。オウム真理教事件は、このような問題を平均的な日本人に対して提起したと言え、我々もそれに対して真剣に考えるべきではなかろうか。<sup>72)</sup>

そんな中、オウムを宗教として扱い、そこからインスピレーションを受けているのが大江健三郎の『宙返り』（1999）である。これまで見てきた作品が、どれもオウム真理教事件を未消化な形で物語化しているのに対し、『宙返り』は確かに事件に依拠しているものの、そこから発展した新しい語りへと近づいている。この作品にはオウム真理教事件への言及が散りばめられている他、テロリズムを計画する弟子たちの存在など、設定もオウム真理教事件を模している。あらすじはこうである。新興宗教の指導者である師匠と案内人は急進派グループが無差別テロを計画していることを知り、阻止するためにテレビ上で棄教する。物語はその10年後。かつては師匠が見る啓示を案内人が解釈することによって成り立っていた宗教だったが、いまや師匠は啓示を見ないまま10年が過ぎている。信者たちはバラバラになりながらも、独自に信仰生活を送っている。そこへ様々な協力者が現れ、二人は活動を再開する。だが案内人が殺されてしまい、解釈人を失った師匠は、それでも「新しい人」の教会を

四国に建設し、バラバラだった信徒グループや新しい信者が集まり始める。そんな中、一部のグループが教義を先鋭化させ集団自殺を行おうとする。師匠は自らを犠牲とすることによってこれを食い止める。師匠亡き後、もはや神の啓示は二度と聞かれなくとも、教会は信仰を守って生活を続けていく。

この物語が色々な面でオウム真理教を乗り越えようとしていることが見て取れる。まずは急進派のテロ計画であるが、麻原が弟子を「止められなかった」のとは異なり、師匠と案内人は自らを貶めるという究極の方法で阻止する。またオウム真理教が虚構的な言語を駆使していたのとは異なり、特に案内人を失った以後の師匠の宗教は言語化されない部分が多い。それは師匠の肉体にできた聖痕や、音楽、絵画、踊りによって表現され、より感覚的、身体的と言えらるだろう。これはオウム真理教が目指した電子的「身体」とは異なるものである。オウムの宗教がコンピュータゲームのキャラクターのような、性も欲も消し去った超人的身体への変身を目指していたとすると、師匠の説く「身体」は病や性を引き受けるものとして描かれる。物語中の大きな部分を育雄と痛を患う木津の同性愛の関係性の描写が占めていることや、冒頭に描かれる踊り子の破瓜のシーンも、生きることの痛みから逃げないという哲学を表しているのかもしれない。また、これと関連しているが、土地との繋がりを重視している点もオウム真理教の教義とは異なる点である。オウムにおいては、実際の土地への眼差しは無に等しかった。信者たちが目指したのは教祖と魂のレベルで同一になるという天上の論理であり、どこかインターネットの世界に通じるもののある電子的なものであった。しかし『宙返り』の世界観は、土地神や歴史、水といった物理的な土地の力を重視し、人間を地面につなぎとめている。

そして、もう一つ重要な相違点は、教祖への依存からの脱却である。この長編小説全体が、教会が師匠への依存を脱していく過程の物語と言ってもいいだろうが、これはオウム真理教のあり方への反省を伴っている。大澤は、オウム真理教の教義の問題点を次のように指摘している。

麻原彰晃は、たとえば、仏教でいう四無量心を独自に解釈し（というより改釈し）、その第四番目の最も重要な項目として、あらゆる頓着（執着）から離れること（聖無頓着）を挙げる。このとき、麻原は、頓着からの離脱ということへの究極の頓着を弟子たちに命ずることによって、彼らの自我の同一性に最後の一しかし堅固な一砦を与えるのである。こうして、弟子たちは、一旦は自身の小さな自我を離脱するかもしれないが、麻原において体現される大きな自我（真我）の内に再度捉えられることになる。[中略] 真我とは、このような無を偽装している経験的な身体（麻原彰晃において現実化している身体）である。こうして真我の理論に、オウム真理教は呪縛されていく。オウム真理教の挫折の究極の原因はここにある。<sup>73)</sup>

『宙返り』において、師匠の身体は最後には「生贄」となって滅ぼされる。しかし、「新しい人」の教会は生き続け、セクトの違いを超えて、土地の人々との良い関係を築き始める。木津が虫の息で語る「オレハ、神ナシデモ、rejoice トイウヨ」<sup>74)</sup>というセリフや、ここは神のいない教会になったのかという問いに対して育雄が答える「教会という言葉は、私らの定義で、魂のことをする場所のことです」<sup>75)</sup>という言葉は、麻原彰晃のような「神」を持つことの危険を十分に意識しているように思われる。

『宙返り』はこうして、宗教問題としてのオウムを乗り越える物語となっており、その点において、他の語りよりも強い力を持つことが出来ているのではないだろうか。なぜなら、オウム真理教はやはり「宗教」として現れ、「宗教」として大勢の信者を得、「宗教」として事件を起こしたのである。やはり『宙返り』を評価する論者である奥山倫明は<sup>76)</sup>、日本は今でこそ無宗教のように言われているが、それは西洋的概念においてそう見えるだけであり、宗教として意識されないレベルで超越性への希求が昔から存在していると指摘する<sup>77)</sup>。だが近代化の流れの中で西洋的な「宗教」の概念が流入し、それへの違和感が宗教全体へのアレルギーとなって現代に定着しているのではないか。従って、毎日の生活において現実的で俗なものにふりまわされることにうんざりした人々が、ふと超能力や神秘性にひきつけられるのは当然であると奥山は考える。もしそうであれば、オウム真理教が彼らにとってある魅惑的な解決策を提供したように見えたであろう。

オウム真理教が現代の日本社会に登場し、あのような事件を起こしたのには理由があるだろう。だが「陰謀史観型語り」にせよ、「麻原集約型語り」にせよ、「周縁へのずらし型語り」にせよ、オウムなるものを「異常なもの」「敵」「他者」として表象し、その対応物として私たちの「一般社会」を「善」として対置するものであった。しかし、オウム事件から何かを学ぶためには、私たちはオウムを宗教として扱った上で、ただ「他者」として排除しようとするのではなく、自己を映す鏡としてそれを見つめる必要がある。

『宙返り』はその点、オウムを宗教として正面から取り扱おうという姿勢を持つ。オウムの教義の問題点を踏まえた上で、安易な「単純化」によって説明し排除しようとせず、オウムが実際の身体から分離させ、天上の理想の領域へと運び去った「宗教」を、再び身体化させ・地上へ降下させようとしている。これは、現実逃避・現世否定のオウムの思想の方向性以外のものを、「宗教」を求める人々に、そしてオウム事件から何かを学び取ろうとする私たちに、可能性として提供する物語なのではないだろうか。

オウム真理教の物語が、信者を惹きつけるにも「一般市民」を嫌悪させるにも、強力な物語であったことは確かだろう。その物語の呪縛から解放されるためにも、いま、私たちはオウム真理教を「他者」として社会から排除し過去のものにして、自分たちの社会を無害化する「単純な」語りから離れて、オウムの物語を乗り越える新たな物語を模索しなければならない。今回の研究で、少なくとも新たな物語がめざすべき方向性は見えてきたような気がする。

## 註

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』地下鉄サリン事件の項参照。アクセス日、2008年9月24日の版。<http://ja.wikipedia.org/wiki/地下鉄サリン事件>
- 2) 大澤真幸『虚構の時代の果て——オウムと世界最終戦争』筑摩書房（ちくま新書）、1996年、298頁。
- 3) 同上、29頁。
- 4) 森達也『「A」マスコミが報道しなかったオウムの素顔』角川書店（角川文庫）、2002年、252頁。
- 5) 池田大臣「『闇』の解説——雑誌報道のなかの「オウム真理教」——」神戸大学編『文化學年報』第18号、1999年、126頁。
- 6) 同上、125-165頁。
- 7) 同上、129頁。
- 8) 同上、133頁。
- 9) 同上、130頁。
- 10) 同上、150頁。
- 11) 一橋文哉『オウム帝国の正体』新潮社（新潮文庫）、2002年、133頁。
- 12) 同上、裏表紙。
- 13) 同上、413頁。
- 14) 同上、412頁。
- 15) 同上、28頁。
- 16) 同上、159-160頁。
- 17) 大澤、前掲書、22-23頁。
- 18) 村上春樹『アンダーグラウンド』講談社文庫、1999年(1997年)、744頁。
- 19) 池田、前掲書、141頁。
- 20) 同上、149-150頁。
- 21) 大澤、前掲書、49頁。
- 22) このインタビューは2008年3月17日に行われた。
- 23) 大澤、前掲書、104頁。
- 24) 映画『カナリア』2005年劇場公開、監督・脚本：塩田明彦、製作：オフィス・シロウズ/衛星劇場/バンダイビジュアル、製作賛助：角川出版事業振興基金信託。
- 25) 大澤、前掲書、48頁。
- 26) 同上、36頁。
- 27) 池田、前掲書、155頁。
- 28) 同上、156頁。
- 29) 同上、150頁。
- 30) 同上、151頁。
- 31) 同上、152頁。
- 32) 同上、152頁。
- 33) 新堂冬樹『カリスマ』上巻、徳間文庫、2004年(2001年)、670頁。
- 34) 同上、上巻46頁。
- 35) 同上、上巻47頁。

- 36) 同上、上巻 67 頁。
- 37) 同上、上巻 48 頁。
- 38) 同上、上巻 92 頁。
- 39) 同上、上巻 100 頁。
- 40) 同上、上巻 101 頁。
- 41) 同上、上巻 45 頁。
- 42) 同上、上巻 68 頁。
- 43) 同上、下巻 502 頁。
- 44) 池田、前掲書、160 頁。
- 45) 同上、152 頁。
- 46) 野沢尚『魔笛』講談社文庫、2004 年(2002 年)、162 頁。
- 47) 同上、257-258 頁。
- 48) 同上、255 頁。
- 49) 同上、253 頁。
- 50) 佐木隆三『大義なきテロリスト——オウム法廷の 16 被告』NHK 出版、2002 年、15 頁。
- 51) 同上、12 頁。
- 52) 同上、12 頁。
- 53) 同上、25 頁。
- 54) 同上、18 頁。
- 55) 同上、69 頁。
- 56) 村上『アンダーグラウンド』27-29 頁。
- 57) 同上、738 頁。
- 58) 同上、738 頁。
- 59) 村上春樹『約束された場所で——underground 2』文春文庫、2001 年(1998 年)、10 頁。
- 60) 同上、285 頁。
- 61) 森、前掲書、198-199 頁。
- 62) 註 25) 参照。
- 63) 大澤、前掲書、123 頁。
- 64) 同上、129 頁。
- 65) 同上、131 頁。
- 66) 筆者とのインタビューにて(前掲)。
- 67) 村上『約束された場所で』311 頁。
- 68) 村上『アンダーグラウンド』752 頁。
- 69) 同上、751-752 頁。
- 70) 同上、753 頁。
- 71) 池田、前掲書、131 頁。
- 72) 沼田健哉「オウム真理教の研究——科学と宗教の関係に関連して——」桃山学院大学編『総合研究所紀要』第 22 号 1 巻、1996 年、115 頁。
- 73) 大澤、前掲書、263-264 頁。
- 74) 大江健三郎『宙返り』下巻、講談社、1999 年、476 頁。
- 75) 同上、下巻、477 頁。

- 76) 奥山倫明 “Spiritual Quests in Contemporary Japanese Writers Before and After the Aum Affair: Ōe Kenzaburō and Murakami Haruki Around 1995,” 南山宗教文化研究所編『研究所報』通号 25、2001 年、33-42 頁。
- 77) 筆者とのインタビュー（2008 年 3 月 12 日）において。